

令和五年度

渋谷教育学園渋谷中学校 入学試験問題

国語

※ 解答は、必ず解答用紙の指定されたところに記入しなさい。

※ 「〇〇字で」、または「〇〇字以内で」、という指示がある場合は、「。」「、」「

「かっこ」なども一字と数えます。

【以下の文章は、第二次世界大戦が終わって数年後、まだ戦争の傷跡が残る時代が舞台となっている。画家として名を成した「わたし」は、戦中、画塾を開き、多くの弟子をとっていた。信太郎もその弟子のひとりだった。】

わたしはいまでも週に三日か四日、夕方になると坂道を下って川のほとりに出る。そして、戦前からここに住んでいる人々が相変わらず「ための橋」と呼んでいる小さな木橋を渡ることになっている。橋にそんな名がついたのは、つい近年まで、それを渡るとわれわれがよく飲みに行った歓楽街に出たので、（人々のうわきでは）気の小さい男たちがよくこの橋の上で、夜の楽しみにふけるか、それとも妻の待つ家に帰るか、心を決めかねてうろろしていたからだという。わたしもときどき思案顔でその橋の欄干に寄りかかっているが、べつにためらっているわけではない。夕日が沈むとき、そこから周囲を見回し、刻々と変わる景色を眺めるのが 1 のだ。

いま下りてきた丘のふもとあたりには、新しい家が続々と建っている。この先の川べり一帯は、一年前には草と泥土ばかりだったのに、いまは市内のある会社が、増員を見越して幾棟もの社員寮を建設している。しかし、完成からはまだほど遠いので、太陽が川面に低く傾くと、建築現場は、まだ市内のあちこちに見られる焼け跡をつくりに見えることがある。

しかし、そういう焼け跡も週を追うごとに少しずつ姿を消している。爆撃の名残りがまだ目立つところと言えは、はるか北の若宮町か、まる焼けになった本町と春日町くらいのものか。だがわずか一年前には、市内の至るところに焼け跡が残っていたはずだ。例えば、〈ための橋〉のすぐ先、かつてわれわれの歓楽街があった地区では、一年前のいまごろ、まだ瓦礫ばかりで、足の踏み場もなかった。しかし、いまは毎日休みなく建設作業が進められている。※マダム川上のバーの外は、昔大勢の酔客が肩をぶつけ合うようにして歩いていたものだが、いまは広いコンクリート道路を敷設しているところで、その両側にはずらりと大きなオフィス・ビルの基礎が据えられている。

数日前の晩にマダム川上は、この町に進出する会社からかなりの①キンガクで買収の申し入れを受けたと打ち明けてくれたが、わたしはそれよりずっと前から、マダムも遅かれ早かれ店を畳んでどこかへ引っ越すほかあるまい、と読んでいた。

「いったいどうしたらいいんでしょう」と、以前にもマダム川上は言っていた。「長いことここでやってきたんですもの、いまさらよそに移るな

んて、考えただけでも 2 わ。きのうも気になって、ひと晩じゅう眠れませんでしたよ。でもねえ、先生、こう思ったの。いくらがんばっても、もう信太郎さんは来ないし、頼りになるお客さんは先生ただひとりだつて。ほんとうにどうしたらいいのかしら」

たしかに最近では、この店の客らしい客はわたしひとりきりだ。信太郎はこの前の冬のちよつとした行き違いから、マダム川上の店には顔を見せないようになった。きつと、わたしに会う勇気がないからだ。マダムにとっては迷惑な話だろう。われわれの行き違いとはなにも関係がないのだから。

(1) 去年の暮のある晩、例によっていっしょに飲んでるとき、信太郎がはじめて新設高校の教職につきたいという強い希望を漏らした。やがて彼は、実はもういくつかの学校に採用願いを出しているんです、と打ち明けた。もちろん、信太郎がわたしの弟子であったのは何年も前の話だから、いまの彼がわたしに相談しないでそういう動きをしても不都合とは言えない。最近では教職などの保証人として、より適切な立場の人物——例えば、彼の雇い主——がいることを、わたしは十分承知していた。にもかかわらず、なんにも言わずに応募したという事実には、正直言つてちよつと驚いた。それだけに、年が明けてまもなく信太郎がわが家にやってきて、玄關でおどおど笑いながら、「先生、こうして参上するのは 3 限りです」と言うのを聞いたとき、かつての強い師弟のきずながふたたび結び直されるかのようで、なにかほつとした。

わたしは客間の火鉢に炭を入れた。そして、ふたりとも冷えた手をその上にかざした。わたしは信太郎のスボンの折り返しに解けかけた雪びらがついているのに気づいた。

「また雪かね」

「ほんの少しです、先生。今朝とは比べものになりません」

「すまないな、ここはとても寒くて。家じゅうでいちばん寒い部屋かもしれない」

「ちつとも気になりません、先生。うちの部屋のほうがよっぽど寒いです」信太郎はにこにこして炭火の上で手をこすり合わせた。「こんなに気を使つていただいてすみません。昔から先生にはたいへん親切にしていたで。何度お世話になったか、とても数えきれません」

「とてももない、信太郎。それどころか、昔はきみのことを多少おそろかにしたんじゃないかと、ときどき反省しているよ。いまさら遅すぎるかもしれないが、なんとかつぐないをしたいので、わたしにできることがあれば遠慮なく言つてほしい」

信太郎は笑つて両手をもみつぶけた。「もう先生、そんなおかしなこと言わないでください。ほんとに何度お世話になったか数えきれないんですから」

わたしはしばらく信太郎を見つめてから言った。「で、信太郎、わたしになができる。遠慮なく言ってくれ」
信太郎はびっくりしたように顔を上げ、つぎの瞬間また笑い出した。

「すみません、先生。あんまり心地がいいんで、こちらにうかがった肝心の用件をすっかり忘れてました」

信太郎は、東町高校への就職は非常に有望だと言った。信頼できる②スジからの情報では、採用する側はかなり好意的な反応を示しているという。

「ただ先生、任用審議会はひとつかふたつだけ、小さな問題ですが、まだ少し③ケントウの余地があると言ってるらしいんです」
「ほう」

「そうなんです、先生。たぶん率直に申し上げたほうがいいでしょう。いま申した小さな問題というのは、過去のことに関わっています」
「過去のこと」

「そうです、先生」ここで信太郎はおずおずと笑い、そのあとようやく思い切ったようにつづけた。「わかっていただきたいのですが、わたしは心の④ソコから、先生を尊敬申し上げております。先生からはほんとうにたくさんの方の事を教えていただきましたし、これからもずっと先生との縁を誇りに思うでしょう」

わたしはうなずいて、先をうながした。

「実は先生、審議会宛てに一筆書いて、わたしの⑤釈明文を裏つけてくださるとたいへんありがたいのですが」

「釈明だなんて、どんなことを書いたんだね」

信太郎はまた困ったように笑い、あらためて火鉢に手をかざした。

「もっぱら審議会を満足させるためです、先生。まったく他意はありません。覚えておられると思いますが、ずっと前に先生と意見が分かれましてね。⑥シナ事変中のわたしの作品のことです」

「シナ事変？ きみと言いつ争いしたなんて、覚えがないなあ」

「すみません先生、わたしの言い方が大げさなんでしょう。言い争いというほどはつきりしたものではありませんでした。ただ、わたしが⑦4にも不同意を表明したことは事実です。つまり、わたしの制作に関する先生のご助言に抵抗したわけです」

「すまないが、信太郎、なんのことを言っているのか、わたしには思い出せない」

「もちろんああいう些細なことが先生の記憶に残るはずはありません。ただ、たまたま人生の分かれ道に立っているわたしにとっては、そのことがかなり重要な意味を持っているのです。あの晩のパーティーのことをお話しすれば、少しは思い出していたかもしれません。小川さんの⑧婚約を『イワうパーティー』を覚えておられると思いますが、あの晩——あれはたしか浜原ホテルで開かれたのですが——わたしは少し飲み過ぎたのでしよう、ぶしつけにも自分の考えを先生に申し上げました」

「あの晩のことはぼんやりと覚えているが、はつきり思い出せるとは言いかねる。とにかく信太郎、そういう小さな意見の相違が、いまのなにに関わっていると言っただね」

「すみません、先生。実はちよつと重要な問題になってしまったんです。任用審議会としては、ある種の事柄を確かめておく必要があるんですよ。なんといいても、⑨占領軍当局を納得させなければ……」信太郎はおずおずとことばを濁したが、また気を取り直して言った。「お願いです、先生、あの小さな意見の不一致をなんとかして思い出してください。わたしは先生のご指導のおかげで多くのことを学べて、ありがたいと思っています。いまでもそうです。が、実際には先生のお考えにいつも同意していたわけではありません。そうです、あの当時わたしたちの画塾が進もうとした方向に対して、わたしは強い疑いを抱いていたと言つても、過言ではないと思います。例えば、思い出していただけと存じますが、わたしはシナ事変のポスターに関する先生のご指示に最終的には従ったとはいえ、その前には疑問を持っただけでなく、あえて先生にわたしの考えを申し上げたのです」

「シナ事変のポスターか」と、わたしは記憶をたどりながら言った。「うん、いまきみのポスターを思い出した。あれは国家存亡の危機だった。もはや迷いを捨て、国家になにが必要かを決断すべき時だった。いま思い出すと、きみはなかなかよくやった。みんながきみの作品を誇りにしたものだ」

「しかし先生、作品に関するご指導にわたしが深刻な疑問を抱いたことも覚えておられるでしょう。思い出していただけると存じます。わたしはあの晩、浜原ホテルで公然と不同意を表明しました。すみません、先生、こんなつまらないことでご心配をかけてしまつて」

わたしはかなりのあいだ押し黙つていたと思う。そのあとで立ち上がったに違いない。というのも、つぎに話したとき、信太郎から離れ、縁側に面した障子のところに立っていたことを覚えていたからだ。

「審議会に手紙を書いて」とわたしはやつと言つた。「きみがわたしの影響を受けていないことを伝えてほしい。頼みというのは、要するにそういうことだ」

「決してそんなことはありません、先生。それは誤解です。わたしは先生のお名前に連なったことを、いまも昔と同じく誇りにしています。ただ、シナ事変のポスター競作の件で審議会が納得してくれさえすれば……」

信太郎はまたことばを濁した。わたしは障子を滑らせてほんのわずかな隙間を作った。冷たい空気が部屋に流れ込んだが、なぜかちつとも気にならなかった。わたしは隙間から縁側とそのむこうの庭をのぞいて見た。軽そうな雪がゆつくりと舞い下りていた。

「信太郎」とわたしは言った。「なぜきみは過去を直視しない。きみは当時あのポスター競作で大いに名を上げた。名誉も賞賛も大したものだった。世間ではいま、きみの作品について別の見解を持っているかもしれないが、きみまでが自分を偽る必要はないだろう」

「まったくです、先生」と信太郎は言った。「おっしゃることはよくわかります。ただ、当面の問題に戻るなら、シナ事変のポスターについて任用審議会にお手紙を書いていただければ、ほんとうにありがたいのです。実はここに、審議会の会長のお名前とご住所を書いてあります」

「信太郎、よく聞いてくれ」

「先生、わたしはあらゆる意味で、先生のご忠告やお教えに心から感謝しております。ただ、現在、わたしは人生の中腹にさしかかっているのです。引退したあとで反省したり、考え込んだりするのは大いに結構だと存じます。でも、たまたまわたしは 5 世界で生きていますし、職を確保するために、ひとつかふたつ片づけておく必要があるのです。それさえ片づけば、もう就職まちがいなしというところまで来ているのですから。先生、お願いですからわたしの立場を考えてください」

わたしは返事をせず、庭に降る雪を眺めつづけていた。うしろで信太郎の立ち上がる音がした。

「ここに住所氏名が書いてあります、先生。お差し支えなければ、ここに置かせていただきます。もしお暇ひまの折にいまの件についてご配慮いただければ、ほんとうにありがたいのですが」

しばらく沈黙ちんもくがつづいた。⁽⁴⁾そのあいだに信太郎は、わたしが振り向いて、彼の屈辱感くつじくかんを和らげる形で退出の許可あつたを与えることを期待していたのだと思う。わたしは庭を眺めたままだった。雪は休みなく降りつづけているにもかかわらず、梢こずえや植え込みをうっすらと白く染めているにすぎなかった。見ているあいだに、さっと吹いた風が、楓の枝を揺すって、積もっていた雪をどきとほとんどすべて払い落とした。庭の奥の石燈籠いしとうろうだけが真っ白に目立つ綿帽子ぼんぼうしをかぶっていた。

背中から、信太郎が失礼いたしますと言って部屋を出て行く音が聞こえた。

(カズオイシグロ作 飛田茂雄訳 『浮世の画家』より)

※マダム川上のバー……川上という女性が営む酒場。

※シナ事変……日中戦争。一九三七年から始まった、日本と中国との間で起こった戦争のことをさす。

※占領軍当局を納得させなければ……戦後、連合国軍から成る占領軍の指導のもと、さまざまな運営がおこなわれた。

問一 線①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。漢字は一画ずついいねいに書くこと。

問二 1・2・3・5に入る語の組み合わせとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 1	楽しい	2	あつかましい	3	忙しい	5	恐ろしい
イ 1	あつかましい	2	忙しい	3	楽しい	5	恐ろしい
ウ 1	恐ろしい	2	あつかましい	3	忙しい	5	楽しい
エ 1	楽しい	2	恐ろしい	3	あつかましい	5	忙しい
オ 1	恐ろしい	2	忙しい	3	楽しい	5	あつかましい

問三——線①「去年の暮のある晩」とありますが、その「晩」についての説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア かつてのような師弟関係はすでに解消されているとはいえ、信太郎が自分に声をかけることなく大事を進めていたことを知り、「わたし」は意外に思った。

イ これまでともに飲む機会があったのに、就職が決定する時点まで信太郎が自分の就職活動について報告しなかったことに対して、「わたし」は疑問を持った。

ウ 以前は自分の助言に従っていた信太郎が、誰にも相談せず、自分の意志で進む道を決めていることを知り、「わたし」はあらがえない時の流れを感じた。

エ バーにいた時には現実とは異なる発言をする信太郎に対して違和感を持ったが、信太郎が自分の家を訪れたことをきっかけに、「わたし」の違和感が消滅した。

オ 今では信太郎に自分よりも適切な保証人がいることを知りながらも、師弟関係を厳格に守りたい「わたし」は信太郎の行動を受け入れることができなかった。

問四——線②「釈明文を裏づけてくださるとたいへんありがたい」とありますが、ここで「釈明文を裏づけ」とはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア シナ事変中に画塾のメンバーによってつくられたポスターのうちのいくつかは、「わたし」ではなく信太郎が中心となって構想したものであることを、「わたし」が審議会に保証すること。

イ シナ事変の期間にポスター制作などの分野で活躍した信太郎が、戦争が終わった今、心機一転、真剣な思いから教職をめざしているということを、「わたし」が審議会に保証すること。

ウ シナ事変中に手がけたポスターに関して、最終的には「わたし」の助言にしたがって制作した信太郎が、当初は「わたし」に抵抗を示していたということを、「わたし」が審議会に保証すること。

エ 信太郎が手がけたシナ事変のポスターについて、今となつては問題となる部分がみられるかもしれないが、戦時下では仕方のない対応だ

ったということを、「わたし」が審議会に保証すること。

オ シナ事変の期間に「わたし」が主催する画塾に所属していた信太郎が、画塾の進むべき方向についていつも「わたし」とは異なる意見を持っていたことを、「わたし」が審議会に保証すること。

問五 4 に入る四字熟語として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 広大無辺 イ 一意専心 ウ 得意満面 エ 無礼千万 オ 臨機応変

問六——線③「きみまでが自分を偽る必要はない」とありますが、それはどういうことですか。七十一字以上八十字以内で説明しなさい。

問七 ― 線④「そのあいだに信太郎は、わたしが振り向いて、彼の屈辱感を和らげる形で退出の許可を与えることを期待していたのだと思う」とありますが、次のア～オは、この部分をめぐる生徒たちの感想です。解釈として明らかな間違いを含むものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア かつて師弟関係にあったからといって、ここでの「わたし」の態度は、いくらなんでも、そつけないものであると感じた。信太郎の「期待」を具体的に想像しながらも、実際には、この後、信太郎の「期待」にこたえるような行動を「わたし」がとらないことから、信太郎の側にだけでなく、「わたし」の側にも、なにかゆずれない思いのようなものがあると感じた。

イ 仮に信太郎に「屈辱感」があるのだとしたら、それは、ここでは、いろいろなことから生じた「屈辱感」であると考えた。就職のためとはいえかつての師である「わたし」に頼みにくいお願いをしなくてはならないこと、「わたし」にきちんと応じてもらえないこと、返事をもらえないまま「わたし」に背を向けられること……などから生じた「屈辱感」だと思った。

ウ 「わたし」が「彼の屈辱感」という言葉を使っている以上、「わたし」が「彼」になんらかの「屈辱感」を与えたと「わたし」自身が感じていようにも思えた。そうしてみると、ここへと至る場面で「わたし」が「彼」にむけた言動のなかには、「わたし」が「彼」になんらかの「屈辱感」を与えると知りながら発せられたものがあるかもしれないと考えた。

エ 文末に「思う」という言葉が使われている以上、ここで述べられているのは「わたし」が「思う」内容であるはず。それなのに、「わたしが振り向いて」や「彼の屈辱感を和らげる形で退出の許可を与えることを期待していた」といった表現があり、信太郎に対する勝手な想像になっていて、「わたし」が決めつけているところがあるようにも読むことができた。

オ 「屈辱感」という言葉が使われているように、戦争による傷跡はさまざまな人に目に見えない形でも残ったようだった。自分たちが手がける作品が遅かれ早かれ問題になることが戦中からあきらかだったとはいえ、「わたし」も、信太郎も、戦後になって生まれた状況に不本意ながらも従わざるをえなくなり、ふたりが同じ「屈辱感」を抱いていることが伝わってきた。

【以下の文章は、ベネディクト・アンダーソン著『想像の共同体』をとりあげ、それをもとに著者が「ネーション」について考察したものである。「ネーション」は一般的に「国家／国民／民族」という意味で用いられる。「ネーション」を重視することによって推進される思想や運動を「ナショナリズム」といい、「国家主義／国民主義／民族主義」など、訳され方は様々である。】

この本はナショナリズムの本でありながら、ナショナリズム、そしてネーションという言葉が何を意味するのかについて、はっきりとは定義されていません。むしろ、定義できないところが面白いという書き方をされています。ただ、ナショナリズムやネーションの特徴、それが他の※イデオロギーや共同体とどう違っているのかについては、いくつも重要な指摘がされています。その部分について、この本をメディア論として見たときに肝心な点に絞って、少し整理しておきましょう。

まず、もつとも重要なのは、どんな小さなネーションであっても、国民というのは互いに「知らない者同士」だということです。日本人なら1億2000万人、極端に小さな国民なら数万人程度ということもありますが、それがみんな知り合い同士ということはあり得ない。「あの人は私の友達だ」というような、間接的な知り合い合いですらない。大半の人とは一生会うこともない。そういう関係性の人たちが、しかし非常に強い同胞意識や運命共同体的な感覚を持つ、ここがネーションの大きな特徴なのです。

アンダーソンは、「これはネーションが出てくるまではなかった現象だ」と言っています。つまり、かつては強い結束力によってまとまっていた共同体というのは普通、その共同体を構成するメンバーが互いをよく知っていて親密であり、信頼しあっているがゆえにそうなるわけです。ところが、ネーションの場合は同じ共同体の仲間のことを直接にはよく知らない。それなのに、なぜか同じネーションの仲間を応援していたり、場合によってはその共同体のためなら自分は死んでもよいとする考え——実際に多くの人がネーションのために殉死した——を持っていました。ネーションのそういう構造が特殊なんですね。

この本は、タイトルにもあるように、ネーションを人々の「想像」によって成立する共同体だと位置づけているのですが、よく考えてみればネーションでなくても、共同体というのはすべて想像によって支えられている。たとえば「家族」というコミュニティを考えてみても、誰を「家族」

だとするかは、その人が「自分の家族」として誰を思い浮かべるかにかかっている。一人暮らしだけれど、離れて住んでいる母親は家族だという人もいるだろうし、同じ建物の中にいっしょに暮らしている人のことを「ただの居候であって家族ではない」と考える人もいるでしょう。

そう考えると、「想像」というのはどんなコミュニティにとってもそれが成立するための必要条件です。ならば、どうしてアンダーソンは、ネーションに関してだけ「想像された」共同体だと強調したのか。それは、ネーションだけは、「想像」のみによって支えられていて、ほかに根拠をもたないからです。

家族であれば、たとえば今は一緒に暮らしてなくてもかつては一緒に暮らしていたとか、育てられたとか、直接のリアルな関係が基礎を与えた上で、そこに想像が①フカされる。ところがネーションは、「想像」の要素がなくなってしまうのは何もなくなってしまう。と聞くと、ネーションを成り立たせている絆はとて脆弱であるかのように思われそうですが、にもかかわらず、ネーションの連帯や結束はきわめて強く、先ほど述べたように、ネーションのために殉死する人さえいる。夫婦や親子・兄弟といった直接の関係の中にある愛情に結ばれている家族のために死ぬというのであれば、それほど驚きませんが、互いのことを直接には知ることがない、想像によってのみ支えられている関係のために死ぬとなれば、どうしてなのかふしぎになります。ともあれ、ここに、ネーションという共同体の、第一の特徴があります。

そして、第二に重要な点として指摘されているのが、ネーションは「限られたもの」だということ。これは、ネーションについて論じるときに、あまりに自明すぎて、逆にしばしば見落とされている重要な特徴です。

「限られたもの」として想像されているとは、ネーションは世界そのものと同一視されることは絶対になし、また一つのネーションの中に世界中の人が包摂されるべきだという理想が抱かれることもない、ということ。どんなネーションも、自分たちは限られていて、世界の部分でしかなく、自分たちの外部に同等の他者——他のネーション——があるということを確認している、ということです。

日本というネーションの外には、韓国とか、中国とかという別のネーションがある。これらが基本的に対等であることを、どのネーションの人にも認めている。たとえば、アメリカ人はとても威張っていて、ときに傲慢であるかのように見えますが、しかし、アメリカ人も、世界中の人がアメリカ人になるべきだとは思っておらず、アメリカも世界の中の限られた共同体でしかなく、その外に、アメリカと対等の別のネーションがあることを積極的に認めているのです。当たり前のことに思えるかもしれないけれど、実は非常に重要な特徴なんですね。

人は、自分が所属するネーションに誇りをもち、自分のネーションを崇高なものと感じ、他者に自慢できるものだと思います。つまり、ナ

シヨナリズムというのは、ある意味で、自分が所属するネーションに普遍的な価値がある、という感覚をもつことです。しかし、にもかかわらず、ネーションは限られたものであって、外部に対等の他者がいることを積極的に承認する。こういう二重性は、ネーション以前にはなかったことです。

ネーション以前にネーションと似たような働きをもった共同体、つまり人々に崇高で普遍的な価値を帯びたものに所属しているという自尊心やチユウセイ心を与えた共同体としては、宗教共同体、とくに世界宗教の宗教共同体があります。^②キリスト教徒の共同体が「教会」です。教会は、クリスチャンの観点からすると、本来は、全人類が所属すべきものなのです。もちろん、実際には、教会に属していない人、属することを拒否している人、別の宗教共同体に属している人がいることを、クリスチャンもよく知っています。そういう人たちは「異教徒」などと呼ばれ、決して、教会と対等な他者とはされません。つまり、教会は「限られた」共同体ではないのです。同じことはイスラーム教徒の共同体である「ウンマ」についても言えます。

あるいは、ネーション以前の重要な共同体としては、「帝国」があります。ローマ帝国とか、中華帝国というときの「帝国」です。日本人にとっては、中華帝国が比較的、わかりやすいかもしれません。帝国というのは、多民族の共同体で、それ自体で一つの世界になろうとする強い意志をもっています。宗教共同体の場合と同じで、帝国は、本来自らが世界そのものであるべきだ、と思っているのです。もちろん、実際には、世界を制覇できませんが、外部の者たちは、たとえば「夷狄」などと呼ばれ、文明化されている帝国と対等の他者とみなされません。考えてみると、「中華」とか「中国」というのは、本来は国名というより「世界の中心」、「世界そのもの」という意味ですから、実に帝国にふさわしい名前です。帝国も、^③「限られた」共同体ではないわけです。

一方では、自分たちの崇高で、まるで普遍的であるかのような価値を誇りつつ、他方では、自分たちの有限性を積極的に認める。これがネーションとナシヨナリズムの大きな特徴だといえるのです。

今、ネーションの特徴を二つまで話しました。この二つは矛盾しているわけではないのですが、しかし、^④反対方向を指している、※ベクトルとして逆向きだということに気づくことが肝心です。一方では、互いに直接には知らないようなメンバーをも包摂していく※ポテンシャルをもつ。つまり拡張指向です。しかし、他方では、自分たちが限定された共同体であって、外部に同等の他者がいることを容認している。つまり限定指向です。このように相反する方向性を持った二つのネーションの特徴が、今日のテーマである「メディア」との関係ではもっとも重要な部分といえるでしょう。

さらにいくつか、『想像の共同体』から読み取れるネーションの特徴を^⑤あげておきます。

三番目の特徴ということになりますが、共同体を構成するメンバーの「平等性」です。本来、貴族や国王の存在というのはネーションにはなじまないところがあるのです。身分制やカーストなどはもつてのほか、ということになります。現実には不平等や搾取が存在していたとしても、国民は常に水平的で平等である、と想定されているのです。この強い「水平性」の意識が、ネーションの重要な特徴です。

そして第四の特徴。私はこれをとっても重要視しているのですが、ネーションという実体は、実際には新しいのに、自らを「古い」と主張するものだという事です。ネーションという共同体が生まれてきた時期は歴史学者や社会学者の間でも諸説あります。実際に古いのだという学者もいますが、アンダーソンを含む多くの研究者が、ネーションは近代の産物だと見ています。「近代」と言っても、具体的にどの時期なのか、何世紀のいつ頃なのか、ということについて見解はかなり分かれているのですが、アンダーソンの場合には——そして他の多くの研究者も——、かなり古いネーションでも、^⑥ダンジョウしたの18世紀の後半くらいと見ています。

皆がよく知っている、ナシヨナリズムの意識のきわめて初期の表現は、アメリカの独立戦争です。ヨーロッパで、「ネーション」とか「ナショナル」という語が、今日の意味で使われるようになったのはフランス革命のときですから、アメリカの独立戦争（独立革命）は、非常に初期のナシヨナリズムです。しかし、できたばかりのネーションが、最初のうちはいかに脆弱であつたかということは、19世紀半ばに、アメリカで南北戦争が起こったことからわかります。あれをばくらは「内戦 civil war」と見ているわけですが、あのとき、アメリカは二つの国に分かれてしまいう可能性があつたのです。最も早い段階で生まれたネーションでさえも、19世紀の後半において、大分裂しそうなったくらいですから、真に一つのネーションとしての連帯を確立できていなかった。こう考えると、ネーションは、歴史的にはきわめて新しいものだということになります。

ところがそれにもかかわらず、ネーションに内在している人々はみんな、「自分たちのネーションは古い」と思いたがり、そのように自己主張するのです。古ければ古いほど自尊心を満足させるらしく、たとえば、「3000年近く前に最初の天皇が即位して……」みたいなことを、ネーションの起原の歴史的事実だと言ったりする。仮に、「最初の天皇」というか、のちに「天皇」と呼ばれるものにつながった支配者が存在したかもしれないが、その人は^⑦「日本」に君臨したわけではないし、ネーションとしての「日本」の自覚など微塵ももっていなかったはずですが。

だから、ネーションという共同体は、

1

 的には新しいのに

2

 的には古い」というねじれがある。これも、他の共同体にはない特徴です。

たとえば「東京大学」という共同体ができたのは明治時代の初めですが、この客観的な事実と主観的な意識がずれるなどということはない。東京大学のメンバーだからといって、「いや、実はそれより昔の時代にも、※プロト東京大学があつて、ずっと続いてきたんだ」なんてことを言い出したりしない。客観的な共同体の始まりと、主観的な始まりとが一致するんですね。ところがネーションというのはそうならないという、ふしぎな構造があるわけです。

最後に、五つ目の特徴として、ネーションは基本的には文化的な共同体ですが、政治的主権をもつことへの強い意欲があること、つまり政治的に自律した共同体でありたいと強い欲求をもっている、ということをお答えすることができます。

ネーションは、まず基本的には文化的な共同体であるということをお答えする必要があります。同じ国語をもつとか、同じ文化を共有しているとか、同じような生活様式を共有してきたとか、といった意識が、ネーションの連帯感の核になっている。その文化的な共同体としてのネーションは、しかし、それだけに満足せず、政治的な主権をもとうとする。主権国家の主権が及ぶ範囲とネーションとが合致しているとき、「ネーション・ステート（国民国家）」と呼ばれます。「民族自決」などというの、ネーションのこうした特徴から出てくる政治目標です。

だから、ナショナリズムは、文化的な※アイデンティティと政治的主権が及ぶ範囲とを合致させようとする運動である、と定義することもできるくらいです。そしてご存じのように、ネーションとしての同胞意識をもっているのに、政治的な主権がないとき、しばしば紛争がおきるわけです。

ぼくらはこんなことは当たり前であると思いますが、歴史的には決してそうではない。たとえば先ほど「帝国」について話しました。帝国は、3 的な実体です。しかしその内部は、4 的には非常に多様なのです。帝国の場合には、文化と政治は整合してはいません。ネーションの五つの特徴をあげました。このように見えてくると、ネーションというのはいろいろな意味で非常に独特なタイプの共同体と言えます。しかし、現在では世界標準の政治システムになっているのです。

（大澤真幸「ナショナリズムの取り扱い方——『想像の共同体』」「『支配の構造 国家とメディア——世論はいかに操られるか』より）

※イデオロギ……政治的・社会的なものの考え方や、思想の傾向。

※殉死……一般的には主君のあとを追って臣下が自ら命を絶つこと。ここでは、「ネーション」のために自ら死を選ぶということ。

※脆弱……もろくよいこと。

※包摂……ある範囲の中に包み入れること。

※ベクトル……ここでは、方向を決めるもの。矢印のイメージ。

※ポテンシャル……可能性としてもっている力。

※搾取……資本家・地主などが労働者などに見合った賃金を払わず、その利益のほとんどを独占すること。

※プロト……プロトタイプの略。基本型・原型。

※アイデンティティ……ある人や組織がもっている、他者から区別される独自の性質や特徴。

問一——線①～④のカタカナを漢字に直さない。漢字は一画ずついていないに書くこと。

問二——線①「ここに、ネーションという共同体の、第二の特徴があります」とありますが、ネーションの「第二の特徴」について説明したものととしてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ネーションは、構成メンバーが共有する、同胞意識をもつような「想像」がなくなれば成立しない。

イ ネーションは、構成メンバーが互いを直接知らないが、「想像」によって運命共同体的な感覚をもつ。

ウ ネーションは、「共同体」として想像される範囲が決まっているため、親密性が増して強い結束力をもつ。

エ ネーションは、その成立を支えるものが「想像」のみであるにもかかわらず、メンバーの結束や連帯は非常に強い。

オ ネーションは、リアルな関係性を基盤にしていないという点において、近代以前の「共同体」と異なる。

問三——線②「『限られた』共同体ではない」とありますが、宗教共同体や帝国において、「『限られた』共同体ではない」とはどういうことですか。六十一字以上七十字以内で説明しなさい。

問四 ―線(3)「反対方向を指している」とありますが、それはどういうことですか。説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ネーションは、直接には見知らぬ者同士の共同体でも、世界的統一を広げようとする意志と想像力をもつ拡張指向と、見知らぬ外部の他者が属する共同体を対等な立場として尊重し、すべての他者を包摂しようとはしないという限定指向との両面を備えているということ。
イ ネーションは、自分たちの共同体は見知らぬ者をも包摂するような、世界に共通する普遍性をもっているという価値を誇る拡張指向と、自分たちの共同体の外部に対等な他者がいることを尊重し、自らの有限性を承認するという限定指向との両面を備えているということ。
ウ ネーションは、普遍性のある価値観によって、互いには見知らぬ者同士が大きな共同体を形成していく拡張指向と、自分たちの価値観は限定的なものであると自覚し、同等の文明や文化をもつ共同体を他者として認めるという限定指向との両面を備えているということ。
エ ネーションは、共通した信仰や思想をもつ見知らぬ者同士が、直接的な関係を超えて結束して連帯していく拡張指向と、共通認識を全く持たない見知らぬ他者の共同体に対しては、連帯を拡張すべきだとは考えないという限定指向との両面を備えているということ。
オ ネーションは、想像を通じて見知らぬ者同士が同胞意識をもつという、リアルな関係を超えていく拡張指向と、自分たちの外部にいる他者も同様に共同体を形成しており、自分たちは世界の一部分でしかないことを承認するという限定指向との両面を備えているということ。

問五 ―線(4)「『日本』に君臨したわけではない」とありますが、それはどういうことですか。三十一字以上四十字以内で説明しなさい。

問六	1	4	に入る語の組み合わせとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。			
ア	1 客観	2 主観	3 文化	4 政治		
イ	1 主観	2 歴史	3 政治	4 文化		
ウ	1 歴史	2 主観	3 文化	4 政治		
エ	1 客観	2 主観	3 政治	4 文化		
オ	1 主観	2 歴史	3 文化	4 政治		

問七 本文の内容についての説明としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ネーションとは、直接的な関係をその連帯の根拠として持つことはなく、言語や文化を共有している見知らぬ者同士が想像のみによって連帯するという共同体である。
イ ネーションが掲げる構成メンバーの水平的な平等は、想像上の連帯と結束のために必要不可欠なものであり、実際に身分制や不平等や搾取があるとそのネーションは維持できなくなる。
ウ 初期のネーションはもろさを抱えており、例えばアメリカの独立戦争は、文化的アイデンティティと政治的主権の範囲を合致させようというナショナリズムの表れであり、連帯の危機であったといえる。
エ 文化的な共同体である範囲と、政治的な主権が及ぶ範囲が合致すると、ネーションは政治的に自律した共同体としての意味を強く持つようになる。
オ ネーションは、これまでの人類が築いてきた組織・共同体・国のありようとは異なる特徴を用いて連帯や結束を実現し、近代以降、現在にかけて世界標準の政治システムになってきている。

(問題は以上です)



※らんには記入しないこと

↓ここにシールを貼ってください↓

--	--

受験番号				
				香
氏		名		

合計得点	
------	--

問二	
問三	
問四	
問五	

[illegible]

問七	
----	--

二
問一
①
②
③
げ て
④

問二	
----	--

[illegible]

問四

[illegible]

問六	
問七	

11

5

10

3

303

303

»

2

203